



パンプキンケーキと 溪流のワルツ

ジジ

する必要ない施錠をし、最後のともし火が去る。

数日たたないうちに、解体されトキから消える運命の、築四十数年の木造アパート。

目の前の異臭ただよう那珂川に向けて部屋の不要となった鍵を思いっきり投げ込む。

さよなら、中洲。

出発を待ちわびている相棒へ、新品のツーリンブーツの感触を楽しみながらゆっくり近づいてゆく。

相棒のリアにセットしたサイドバック、バンドで固定したテント、シュラフのを安全を確認する。

ブーツのチャックをあげシートに体を乗せる。

キーを差込み、右手のグローブを装着し、時計が見えるように少し捲る、左手のチャックを引き、
キーを回しエンジンを点火する。

ドリウツと低く唸ると、トルクの強さを感じさせるシングルのそれが強い鼓動を、囲むコンクリートの高層ビルに、

反響させる。

タンクの両サイドには音叉を三つ重ねた誇り高きエンブレム。

幼いころ走り回ったこの中州とも、これで最後、振り返り、右掌を挙げ、数年お世話になったアパートに別れを告げる。

スタンドを蹴り上げ、ギアアを入れる、スロットルを軽く回しながらクラッチを戻す。

黒い相棒は単発の振動を景色に刻みながら走り出す。

三瀬を越え到着するのは、10時ころになるかな。

さよなら中洲。

R202を西へ、カラフルで無機質な構造物に埋没した、アスファルト舗装を走り抜ける。

荒江の交差点からR263にショートカットなルートではなく、見慣れた景色に浸りながら、幹線を法廷速度で走る。

妙見口を過ぎたあたりから風景が変わり始める。

低い山に囲まれた町、わずかに残る田園、まだ昔の福岡が残っている、そんな気がする。
大出手橋を渡り室見川を過ぎる頃はさらに風景が変わる、山がすぐそこに迫り、田畑はぼつりぼつりと
点在する程度の存在になる。

山越えに移った行程に、怯むことなく回るエンジン。
45度程度の体勢を維持しながら曲測のループ橋を輪回る、スムーズにこなす相棒の足回り、とてもたのもしい相棒。

息を止めていっきに三瀬トンネルを突き抜ける、トンネルを出るとすぐに料金所。



料金所を過ぎてセブンイレブンに立ち寄る、缶コーヒーを1本、それとタバコを補給。
コーヒーをのみほし、1本すい終わるとバイクを発進させR263へ戻る。

下りぎみの道をしばらく走ると三反田と表示された信号。
右へ折れR209に入る。山奥、奥の奥と表現すべき道、途中トンネルを走りぬけさらに山奥の道を走る。
川を渡り左折しR323に、そしてもう一度右へ、そしてR37へ入る。

山の里そのものの風景を駆け抜ける、これだけ民家がない山奥もめずらしい気がする。

前方右側になにか見える。
近づくにつれ正体はあっさりと判明する、ブログで観た案山子の記念碑、顔がほころぶ。

よこにせせらぎを見ながらバイクは進む。
杉やヒノキなどの常緑樹植林のなかに、サクラ、イチョウなど秋の装いをした落葉樹がぼつりぼつり。

せせらぎに赤い葉っぱのイロハモミジが見えた、すこし遠くに一軒の民家。
スロットルを戻し減速する。

民家の入り口にバイクを着ける、キーを回しエンジンを停止する。
サイドをブーツで蹴り出してバイクを傾ける。

ブログで観た白いマウンテンバイクが玄関にとめてある。

右腕をひねり時刻をみる、10時を少し越えている。

右手のグローブをはずす、タンクバックのチャックをずらし、中からポストカードと花を一輪とりだし玄関へ向かう。

ステップを上がり呼び鈴を押そうと手を伸ばす、「こんにちは」と建物の影から女性が現れる。左手から右手にそれを持ち替え、「お届けものをお持ちしました、おとなりのご友人からの」彼女にポストカードと花を渡す。

「かおりです、遠いところからお疲れさま、すてきな贈り物をありがとう」それをゆっくりと受け取ると、笑顔で彼女は礼をのべる、そしてぼくの手を引き、「お待ちしていましたよ、さあこちらへ」

そこにテーブルと椅子が2つ、テーブルの上にはパンプキンケーキとティーカップ。

ヒューと風が、モミジを赤い葉を揺らす。

静かな山里、溪流のせせらぎがスローテンポにリズムを刻む。

やっと西海橋が見えてきた。

日が沈む時間が迫っている、できれば島に渡りたい、ぼくの右手に力が入る。



山里を発ってノンストップで走り続けているが、以外に時間が早い、晴れていた空も、灰色に変わっている。

灰色の空・・・記憶が何かを呼んでいる、たぐり寄せようと、脳が信号を送るより早く、西海橋に乗った。

修学旅行できた観光名所、あのとき渦は、まいていたかな。

橋の中ほど、ビュッと横風、カウンターをあて海に押し出されそうな相棒を立て直す。また風。姿勢を戻し前方に視線を戻すと、同じように風に流された宅配の軽トラック。

荷物をいっぱい詰めるように背高い幌をあげた軽トラック。

ひきつる運転手の顔が見える、スローモーションのように、その口が悲鳴を上げるために開いていく。

回避行動する意味すらない距離。

神経の指示なのか、左足はペダルをたたき、連携するように、右足がペダルを踏み、右手はレバーを握り締める。

目と脳は静かにその瞬間を見続ける。

ヘルメットを取り会釈。「はじめまして」

「あら、ごめんなさい、はじめまして、ようこそ山の奥の里へ」、笑顔の彼女。

少し甘いパンプキンケーキと、ハーブが香る紅茶。

少し照れながらの彼女との会話、心臓の鼓動が溪流のせせらぎのテンポにシンクロしている。

右のミラーに彼女が見える、大きく手を振ってくれている、ぼくはギアをひとつあげて、左手をあげる。

灰色の空を見つめながらぼくは落下している。

強い衝撃、腹部の圧迫そして宙を舞う。

脳が必死で、意味のない回避行動を模索している、心は走馬灯のようにまわる記憶を見つめている。

ミラーに写る彼女がなにか言っている。

衝撃、海面にたたきつけられた体は痛みすら伝えてこない。

沈んでいく、灰色の空がぼくを呼んでいた気がした。

白いテーブルに焼きたてのパンプキンケーキ、そばには溪流がもみじの色を写しながらゆるやかにワルツを奏でる。